

小田原史談

第102号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

(中野敬次郎氏執筆)

「後北条氏秘話」を

会報掲載するに当り

香川 政治 (載録)

(一)北条氏康に

八男七女あり

小田原北条氏的全盛期をつつた三代の太守北条氏康は、二十年の関八州の治世中に三十六回の合戦をして、その全部勝利であったといわれ、古書にも「北条氏康公、生涯三十六度の合戦に一度もあけ巻を見せ給うことなし」と記して、その華々しい戦歴を激賞されている。彼

はまた政治家、文化人としても秀れた人物で、天文二十年(一五五)に京都の南禅寺の第二百六十一世東嶺智旺禪師が東遊の途次に、春四月箱根を越えて小田原に入り北条氏に接したとき、城下町小田原の繁栄と氏康の優れた政治を見て驚歎し

て、著書「明叔録」の中に次のように述べている。

「湯本早雲寺よりして一里すべし。府中小田原に至る。町の小路は数万間、地に一塵なし。太守の墨は喬木森々として高館巨麗なり三方に大池あり。池水湛々として浅深計るべからず。白鳥その他の水禽翼々然として遊べり。

太守平日実地を踏む。表は文、裏は武、刑罰清くして遠近服す。まことに古代無双の霸王たり。およそ士たるもの敬せざるべからず。万般耳目を驚かす。なかなず風流の温籍は、春雨の海棠、風中の楊柳のごとし。」

ところが、この氏康がまた頗る子福者で、実に八男七女の子供を持っている。そこで、この方面のことを

「関八州古戦録」という書物に述べて、これらの子供が、男女そろって立派に成人し、皆所を得て、一流の人物として活躍するに至ったことを言います。

「類葉の繁栄、親戚の多幸誠に比なき固執なりと羨まぬ者はなかりけり」と記している。

さて、この沢山の子供を生んだのが、太守夫人の瑞深院であった。

瑞深院は駿河国主今川氏親の娘で、母は氏親正室の京都公郷中御門大納言宣胤の息女であった。有名な今川義元は瑞深院夫人の弟である。駿河国の府中城(静岡市)に誕生し、恐らく天文四年(一五五)十五歳のとき小田原城に入興したものと私は推定するが、この時氏康は二十一歳で、以来偕老同穴の契りは三十七年間に及んだ。夫人は非情な美人で教養が高く、氏康の愛を一身にうけて、誠に幸運な生涯を送った。また誠に多産な女性で、実に十二人の子供を生んだのである。「今川記」の中に、

「氏康(今川氏)の息男あまたあり、男三人、其他に女三人あり。一人は小田原北条左京大夫氏康の御前にて、此の腹に男女十二人の子供は、他の女性の生んだものを、瑞深院が我が子として育てたのではなく、真正一腹十二人であった。夫君氏康との夫婦生活は三十七年間で、五十一歳で卒去しているの、さすれば、仮りに結婚の翌年十六歳の時から生み初め、四十歳までとしたら、この間二年に一回の懐妊ということになる。驚いた話だ。その生んだ子供達は、男子は、

○北条氏政(相模守。左京大夫、第四代小田原城主)
○北条氏照(陸奥守。八王子、榎本、古河、栗橋、小山の城主)
○北条氏邦(安房守。鉢形、箕輪の二城主)
○北条氏規(美濃守。葦山、館林、三崎の三城主)
○北条氏忠(左エ門佐。佐野、足柄の二城主)
○北条氏堯(右エ門佐。小机城主)
○北条氏秀(武田信玄の

養子、後に上杉謙信の養子) 女子は

○北条常陸介氏繁夫人
○千葉親胤夫人
○今川刑部大輔氏真夫人
○太田源五郎氏賢夫人
○武田大膳太夫勝頼夫人
以上七男五女合わせて十二人は、氏康の子として正史にあらわれるもので、瑞深院の生んだ一腹十二人に当たるものであるが、実は氏康にはまだこの他に子供がある。

北条氏系図では氏康の嫡子は、普通には後の四代太守となった氏政ということになっているが、本当は氏政は次男であって実兄が一人ある。

北条氏の小田原城下の氏寺であった伝心庵に現存する「伝心庵過去帳」(原本失われ書写本残る)に「天用寺殿雄丘英公大居士、氏政公含兒」とあるのが見つかりました。

高野山の高室院所蔵の「北条氏過去帳」(北条家過去名簿)の中にも「天用院殿雄丘英公大禅定門。神後。相州太守氏康御息新九郎殿 天文二十一年三月二十一日」とあるのが発見されているので明らかであるが、北条氏は始祖北条早雲の前名

伊勢新九郎にちなんで、代々嫡男は幼名は新九郎を名乗るのが通例となっているが、氏政は幼名を乙千代と名付けられていて、次男であることを示しており、天用院が新九郎と名付けられているから、氏政は次男で、天用院が長男であったことは明白である。

天用院は誰の腹から生まれたかというに、恐らく瑞深院が生んだものと思われる。次男氏政は天文七年の生まれで、瑞深院が嫁してから三年目、彼女十七歳のときのことであるから、天用院はその前年の子であるに違いない。そうすると天文二十一年の死亡とする十四、五歳で早世したので、実督を繰ぐに至らず、次男の氏政が継いだのであるが、古文書の中にも「新九郎氏政」と記したのも見えるが、果たして氏政が新九郎を名乗ったとすれば、天用院の卒後、家督を継ぐようになって自称したか、乙千代を新九郎に改めたのであろう。

女子達についても、上記五人の他に、古河内守夫人となったのと、早世した二人があつて、氏康の子供は合わせて八男七女、計十五人となるが、瑞深院がまさか十五人も生んだとは思えないから、隠れた女性が

女子達についても、上記五人の他に、古河内守夫人となったのと、早世した二人があつて、氏康の子供は合わせて八男七女、計十五人となるが、瑞深院がまさか十五人も生んだとは思えないから、隠れた女性が

女子達についても、上記五人の他に、古河内守夫人となったのと、早世した二人があつて、氏康の子供は合わせて八男七女、計十五人となるが、瑞深院がまさか十五人も生んだとは思えないから、隠れた女性が

一人か二人はあったのだからか。

(一)賢明美貌の人

北条氏秀

前記したように、全盛と繁栄を極めた小田原北条氏も、元亀二年(一五七二)に英傑北条氏康と賢妻良母の聞こえ高き夫人の瑞深院とがわづか四十九日を距てたのみで相次いで歿したのは極めて衝撃のことであったがこの年を境として北条氏は

守成時代に入り衰色も随時あらわれてきた。さしほ繁栄を誇った一族の中に、悲劇的現象のあらわれた先発となつたのは、氏康の末男北条氏秀の悲業の最後であった。

武田三郎君とか北条三郎君とかの名で知られた北条氏秀という人は、氏康の七男(実際は八男)で幼名は国増丸といひ、初めは北条七郎と名乗ったが、氏康息男中の末っ子であった。

生来、資質頗る賢明で知られていたが、また非常な美男子であつて、少年の頃からに美貌は全関東の婦女を悩殺した。十七歳のとき北条、武田和親の政策で、武田信玄の養子となつて甲州に入り武田三郎氏秀と称した。

彼が甲州にはいつ頃、女性たちがこの人にあこがれて、

「武田三郎殿と一夜契りては、梨子地の鞆召すと泣いて御座るべし。辛勞でもりもすべし」

と語り合った言葉が、その後全関東の女性達に波及し流行歌として語られるに至つたと、古書に伝えている。

ところが、彼が甲斐に入つて間もなく、北条、武田の不和で小田原に帰されて来た。

永禄十二年(一五六七)武田信玄が駿河の蒲原城を猛攻したとき、城主であつた北条幻庵の妻子新三郎綱重が弟の覚風法印と落城とともに兄弟枕を並べて討死したので、幻庵に男の子が絶え

たから、愛娘の婿として氏秀を迎えて養子したので、今度は北条三郎氏秀と称したのである。

北条幻庵は本名北条長綱といひ、北条家始祖早雲の第三子であるが、仏門に入つて入道幻庵と称した人であつたので、北条氏代々の政治と文化を指導した一世の木鐸として知られる。北条氏歴代の黒衣宰相の位置にいて隠然たる勢力を持っていた人物だ

がこの永禄十二年の出来事は幻庵がすでに七十七歳の高齡に達していた時であつたので、氏康が非常に同情して秀才の聞こえある我が子氏秀がたまたま甲州から

小田原に帰つて来た時であるので、この子を幻庵にすめて養子として跡目を継がせたのである。これは有名な事件であるので「北条五代記」にも

北条三郎長綱、法名幻庵に去ぬるの城において子息新三郎兄弟討死有りしかば、老後に愁歎限りなく、日夜伏して沈まりければ、命も危く見えにける。氏康七男を幻庵の養子にし、幻庵の末子は女子にて御座しける故、合せて夫婦とせんと名付け、即ち元服あつて三郎と名付け、所領ごとごとく譲らしめける」と言つていて、しかし氏秀には席の温まる暇もなかつた。元亀元年北条、上杉和談の成立によつて、幻庵のところから離れて、上杉謙信の養子として越後に入るに至つた

(三)氏秀越後に入り謙信の養子となる

上杉謙信は生涯無妻であつたので勿論実子がなかつた。尾政景の遺子で、謙信の実弟仙桃院の子である長尾嘉平次頼景を養子にした。そして永禄十二年北条氏康と和して盟約を結び、その翌年の元亀元年に氏康の第七子、三郎氏秀を養子に迎へたことは、前記の通りであ

る。そして氏秀は謙信の旧名をついで上杉景虎と改め

た。

この長尾頼景が後の上杉景勝であるが、この人は弘治元年の誕生で、父の尾張守政景が、永禄七年七月に湖水で遊泳中に溺死したのを、十歳で遺児となつた謙信があわれみ、その年養子にしたのであつて、天正三年正月(一五七五)には上杉謙信の養子として越後

相越和談の約束によつて、上杉謙信の養子として越後に入ったのであるが、それより五年前に上杉景勝が謙信の養子として同城に入つていたのであるから、二人の養子の関係は頗る微妙であつて、氏秀の立場は最初から不安に揺れていたのである。氏秀は越後に入ると同時に、上杉景虎と改名し、表面上は謙信の後嗣という形の如く見えるが、何等謙信と血脈のつながるものでもなかつた。

これに対して景勝の方は上記の通り、謙信の末子の子であつて、実父亡き景勝を十歳のときから養子として手元に置き、頗る愛憐しその教育、育成には非常に力を入れておつた程であるので、天正三年正月景勝が

彈正少輔に任官した後は、家臣の者は、謙信を殿様または御実城様と呼び、二の丸にある景勝を中城様と呼んでいたところから見るとこれと対立する景虎が同じ城中にあつても、任官する

こともなく家臣達は謙信の後嗣は景勝であるという考えに大半傾いていたようであつた。木村徳衛者「直江兼統伝」

かかる態勢の中に天正六年(一五七八)三月九日、北陸の勇者上杉謙信が突然、卒中発病して、十二日四十九歳で急逝したのである。しかも宿敵武謙信安殺してすでに五年であるので、ここに大軍を催して、先づ関東を鎮撫して、後顧の憂を絶つてから上洛しようと考え、分国の諸将士を糾合していた際であるので、春日山城内外及びその附近に充満していた是等の將兵達は、この突然の訃報に茫然自失して適従するところを知らぬ有様であつた。

ともあれ、上杉家では直ちに謙信の後嗣を定めなければならなくなつたが、上杉家の宿将達の間では、若し景虎を後嗣にするならば謙信の遺業はみな小田原北条氏に蹂躪されるおそれがある。それに対して景勝は謙信の最も近い血統であり人物も沈勇で、武将として

の器量は景虎にまさつていると考えられていたので、宿将達は景勝を擁立して事熊の收拾を図ろうとしたのである。

しかし、景勝の寡黙沈勇なに対して、景虎の方は温順な性質で個人的には大変好感を持たれていた人物であつたし、また彼の夫人は景勝の実妹であつた関係もある。その上に、この頃春日山城の近くにある御館にあつた旧関東管領上杉憲政が景勝の庇護者であつたといふような事もあつた、味方するものも多かつたので結局、天正六年より天正七年にかけて、越後上杉家は、上杉喜平治景勝派と上杉三郎景虎の二派に分かれて家争ひの戦が起り、これを春日山合戦といつたが、時に景勝は二十四歳、景虎は二十五歳であつた。

四春日山合戦起る

以上記したところは、主として「上杉謙信伝」「景勝御記」「上杉家文書」などの古書や「直江兼統伝」など、上杉家寄りの資料と文書をもとにして要約したものであるが、これを三郎景虎の生家の小田原北条家寄りの資料文書によると、大分事情が違ふようになつて

来ている。「北条五代記」によると、上杉謙信が死んだとき遺言があつて、分国

の器量は景虎にまさつていると考えられていたので、宿将達は景勝を擁立して事熊の收拾を図ろうとしたのである。

しかし、景勝の寡黙沈勇なに対して、景虎の方は温順な性質で個人的には大変好感を持たれていた人物であつたし、また彼の夫人は景勝の実妹であつた関係もある。その上に、この頃春日山城の近くにある御館にあつた旧関東管領上杉憲政が景勝の庇護者であつたといふような事もあつた、味方するものも多かつたので結局、天正六年より天正七年にかけて、越後上杉家は、上杉喜平治景勝派と上杉三郎景虎の二派に分かれて家争ひの戦が起り、これを春日山合戦といつたが、時に景勝は二十四歳、景虎は二十五歳であつた。

四春日山合戦起る

以上記したところは、主として「上杉謙信伝」「景勝御記」「上杉家文書」などの古書や「直江兼統伝」など、上杉家寄りの資料と文書をもとにして要約したものであるが、これを三郎景虎の生家の小田原北条家寄りの資料文書によると、大分事情が違ふようになつて

来ている。「北条五代記」によると、上杉謙信が死んだとき遺言があつて、分国

の器量は景虎にまさつていると考えられていたので、宿将達は景勝を擁立して事熊の收拾を図ろうとしたのである。

を二分として、総領分と前関東管領上杉憲政の隠居分とを三郎景虎に譲り、残り分を喜平治景勝に与えるとのことであった。景勝は謙信の師の子で甥に当たるのであるが、景勝の父長尾越前守義景(政景)は信州池尻川を渡るとき、謙信の家に來に船の楫を抜かれて溺救されたので(上杉側資料は越後上田庄の野尻池で遊泳中に溺死したとある)、その子景勝は養子になっても謙信に対して内々父を殺された恨みを持っているだろうと推察していたので、家督は小田原より申し請けた三郎氏秀に譲る考えで総領に立て置いて、上杉三郎景虎と名乗らせたのである。ところが、謙信急死の直後、景勝が春日山の本城を義父から譲られていたのであると本丸に乗り込み、兵を以て二の丸にいた三郎景虎を城から追い出したので、景虎は退いて旧管領上杉憲政の隠居所である御館に入り、ここに拠って対抗したので、ここに景勝派、景虎派の合戦、すなわち春日山合戦が展開するに至ったのであると記述しているのである。越後側の言い分と、小田原側の言い分とは、相

当の相異があるが、互いに自己ひいきの言い分資料の相異は止むを得ないもので、今となつては、どちらが真実かわからない。春日山合戦、一名を御館の乱という。景勝派は武田勝頼に授軍を仰ぎ、景虎派は景虎の生家の小田原北条氏に救を求めたのであった。武田勝頼は強力な軍兵を越後まで送って積極的に景勝と共同戦線を張ったにもかかわらず小田原では景虎の父勇将氏康世を去つてすでに六年、景虎の長兄氏政の代になつて何事も守勢勝、弄策勝で政行の意志なく、越後追伐の名目を掲げて出馬したが武田、上杉との不和を恐れ選々として上州辺まで形の如く出陣したのみで本軍は戦に加わらなかつたのであった。そして上州の一、二将をして越後に入り御館を援助せしめたに過ぎなかつた。天正六年六月頃より年末まで、両軍が越後国内の所々で交戦して互に勝敗があったが、決戦に至らずして年を越えた。天正七年二月一日、景勝は大軍を發して、御館の景虎本陣を一気にあふらんとした。この時、上野国厩橋城の城主北条輔広の子景広は、小田原北条方の先兵として越後に入り、府内の来迎寺に營を構えていた。この日

急を知つて、倉皇馬を馳せて手兵とともに御館に入らんとしたが、途中にて景勝方の兵にさげざられ、获田孫十郎長繁という者の槍に刺され重傷を負うたが、鮮血にまみれたまま御館の城内に飛び込み、景虎の姿を見て、遂に力つきて歿したのである。景広は驍勇をもつて聞こえ、御館上下の頼みとするところであつたので、彼の討死によつて景虎方、士氣大いに衰えて逃亡者も相次いだ。

田三郎景虎 殿尾城に自害す 景虎方の勢はこれより日にに縮まり、北条氏の援軍もはや望みがなくなつた。

前関東管領上杉憲政は、景虎に同情のあまり、自議を成立させようとして、自ら景虎の幼児があつたのを携えて春日山城に向つたのであるが、四屋という処で守兵のために殺されて、幼児とともに非業の最後を遂げたのである。かつては、鎌倉の関東管領家の当主として関東八州に活動した人であるから、その最後は誠に哀れであつた。

そこで三郎景虎は信州に亡命せんとして城を脱出した。四屋を経て藤巻原に至つたが、ここで景勝方の城兵の追撃急なるに會し、從

兵殆んど討死し、僅かに身を以つて逃れ、殿尾城に入つたのである。城主堀江宗親はかねてから景虎に向かつて籠城して救はれと言つていたので、これを頼つて城中に逃げ入つたのであるが、宗親はすでに景勝に内通しておつて、火を放つて寄手の軍を呼んで城を陥入らしたため、景虎は遂に悲憤の自刃を城中に遂げたのである。

時に天正七年(五十九)三月二十四日、景虎二十六歳の生涯であつた。

小田原本軍は当主氏政の弟八王子城主北条陸奥守氏照が総大将として出陣したが、上野国沼田にて景虎敗死をきいて、もはや益無しとして全軍小田原に引きかえして來た。小田原軍のこと何んともうら淋しい話である。

前記したように氏秀は北条氏康の末男で、北条氏の全盛と繁栄の絶頂期に成人しながら、資質温順賢明で絶世の美男子であつたというのに、戦國の世の和合離反、変転極りなき政策の犠牲となつて、流転を重ね無惨とも言うべき悲劇の生涯を遂げた佳人薄命の生涯は誠に同情にたえない。後北条悲劇史の開幕であつた。

館の戦に景虎が最後を遂ぐるところを記した「北条五代記」の記事について述べたい。

「勝頼(武田)は兄弟の好有りければ、甲州勢を頼母しく待ち給へども、其のいかなく却つて敵になり、小田原勢は程遠くして未だ來らず、御館に軍勢少く、其上平城にて兵糧も無くして大敵を防ぐ可き様なくして、義祖父憲政ならびに三郎景虎ついで叶はず、三月十八日に自害して御館に火をかけしかば、景虎方の侍残らず討死す。この由小田原勢上州沼田にて聞き、益無しとして引き返す。斯くて景勝越後の主と成り給うされば三郎殿御前は、幻庵の息女なりしかば、やがて越後によりして送る。是後右衛門佐殿の御内室に成し奉りける」とある文章であるが、この戦に最も不義的な態度を取つたのは武田勝頼で、彼は北条氏政と約して、三郎景虎を援けんとして越後に入り、却つて約に叛いて、反対の景勝と組んで三郎景虎を攻めて滅しているのである。文中にも「兄弟のよしみ有りければ」と記しているように、景虎の妹(北条院)は武田勝頼夫人であることは有名なことであるので、景虎は甲州勢を非常に

たのみにしていたが、逆に甲州勢に攻め滅されるような結果になつた。彼が最後に御館城から脱出して信州に逃れようとしているのも、小田原に行かんば道遠し、信州は隣國で妹婿勝頼の領地であれば、何とか生命を保つ方途もあるかと思つたのではないかと推察すると、景虎の心境がまたいかに哀れを増すのである。

小田原方面の資料では、景虎の自害は三月十八日御館城中となつては、越後側の資料は三月二十四日殿尾城中でということになつては、恐らく三月十八日は御館城が兵火で落城した日であつて、景虎は更に逃れて殿尾城まで行つてが正しかろう。

その上、もう一つ解釈に困る問題は、景虎の夫人が誰かという点で、「北条五代記」は數個所に北条幻庵の娘であることを記し、この夫人をつれて越後に行つたとし、景虎自害後にこの夫人が越後から小田原に送られてきて、後には景虎の兄右衛門佐北条氏堯(氏光)の正室となつたことまで述べられていると思われ。ところが、上杉側の資料では、景勝の妹が夫人とな

つたとあつて、これも諸種の事情から否定できないようである。そうすると、三郎景虎の夫人は幻庵の娘とすべきか、上杉景勝の妹とすべきか、景虎と婚姻したことが事実とすれば、景虎は二人妻を持ったのか、いやどちらかが正室で、他が側室の位置にあつたのであるか。私には多年この問題の解決がつかないでいる。

なお、三郎景虎(氏秀)には一人の男の子があつて道満丸と言つたが、前記したように合戦中に上杉憲政とともに越後四屋というところで、景勝側の守兵に殺害されてしまった。恐らく上杉憲政が景勝側と和議を講じ、道満丸を人質に入れようとする行動の時であつた。この子は果たし、幻庵の娘の所産か、景勝の妹の産むところであつたらうか(つづく)

(一)百日間の首府、石垣山城

小田原の四方にある有名な石垣山は、もとは笠掛山とか松山、または西の高山などと呼ばれていたが、天正十八年(一五九〇)の小田原戦役のとき豊臣秀吉が山頂に本営を置いて、豪壮な石垣城を築いてから石垣山と呼ぶようになった山名である。

城は石垣山一夜城とか、太閤一夜城とか呼ばれている。一夜城という名の起りは、築城の初め、山頂の密林の中に陣營の堀や骨組を作つて、それに杉原の白紙を張つて白壁を塗りあげたように見せかけて、一夜の中に樹木を伐採したので夜が明けて小田原城中から仰ぎ見た城兵が驚愕して、一夜のうちにあんな山頂に城を築きあげた秀吉は、天魔の化身であろうと言つて恐れをなし、これから小田原城兵の戦意が失われたという俗説から生じたものである。実際の築城には、同年四月五日頃から始めて完成する六月二十六日まで、八十余日を費しているし、人員は約四万人が動員されている。

城の完成した六月に、徳川家康の武將である榊原式部大輔康政が、西國に留守居中の加藤主計頭清正に宛てた長文の書状に、この石垣城の規模を説明して「上様御陣は西の高山の頂上に十余丈の石塁を築き箱根山連に雲を穿ち、敵城直下に御覧なされ候。御屋形造りの様の広大なる有様は、凡そ聚楽大坂に劣り難く相見を候。其の外一手一手に陣城を構へ、天守、矢倉白壁天に耀き、陣屋々々

に悉く塗籠、小路々々堅横に割り、陣所は大将の意業と相見え候。(中略)高広として大なる屋形もこれ有り、細少にて奇麗なる屋形もこれ有り、松竹を植へ草花あり、好みの野菜、茄子、大角頭、蕪等も作る所これ有り、惣じて色々の植木、書院、教寄屋目を驚かし候。大道は東西五十騎往復の馬の足音、物具の声十二時中鳴り止む間なく候又日本國中より商人集まり来ると見え、唐土高麗の珍物、京、堺の絹布、一つと物、京、堺の絹布、一つとして売買せざるは無く、京田舎の遊女軒を列ねて小屋を掛け、戸前市をなす。陣中一日も貧しきを得ざる事に候。然れば御陣中において生涯を送るとも退屈あるべきとも寛えず候」と記している。多少の誇張があるにしても、「御屋形の広大な有様は、聚楽第一と大阪城にも劣らぬ程だ」と敢えて報告しているところからして、一夜城の豪華な結構が察せられる。

秀吉が去つて廃城になつてから風雨三百八十余年を経過した現在でも、石垣、曲輪の遺構はほぼ当時のままだに残つていて、その雄大な規模を見ることができるのであるから、秀吉在城中の豪華さは、恐らく榊原報告文書の通りであつたであらう。

この時の戦に秀吉指揮のもとに小田原城を包圍した海陸の軍勢は実に十五万でこれらの各部隊の軍使は日夜を分かたず石垣山城に往來したし、徳川家康、織田信雄、蒲生氏郷、宇喜多秀家、羽柴秀次、細川忠興などの参戦の諸將も次々と当城に伺候して指揮を仰いだり、また島津文保、大友吉純、吉川広家、小早川隆景など幕僚は、各々手兵を率いて城の内外は駐屯していた、大軍を率いて箱根を越して、一旦湯本の早雲寺に本営を置いた秀吉が、石垣山の城に移つたのは四月八日前後であるが(家忠日記、大三川志)、五月十四日に石垣山から政所(夫人浅野氏)に宛てた書翰(小山文書)の中には「かへすく、こなたの事、心やすく候べく候。はや御ざとく(御座所)の城も、いしくら(石倉)出来申し候間、大どころ出来申し、やがて、ひろま(広間)、てんしゅ(天守)建て可申候」と言っているから、五月の中程には天守、広間などの重要建築物がまだ完成するに至つていないが、榊原康政などが目を驚かせたような豪華な建物が山上の諸所に夜を日をついで建造されていくことが想像されるのである。

そのへ愛妾淀君が多数の女房衆をひきつれて賑々しく石垣山城に乗りこんできたのである。秀吉は小田原城攻めは最初から長閑の陣である覚悟で来ているから、諸將にも妻子を陣中に招致することを許しているし、自分も愛妾淀君以下の女房衆を石垣山の新城に呼び下す心づもりで、早くも四月十三日付の政所への第一発の書翰で小田原に落ち着いたが身辺が不便であるから、一日も早く淀の君達をこちらへ送つてほしいという心情を切々と漏らしている。秀吉から山城の淀城に遣わされた稲田清藏にももたらされた淀君が多数の侍女を従え、一行凡そ百五十人が石垣山城に到着したのは五月二十日であつた。

一行の中には秀吉の第二側室松ノ丸局(京極高吉の娘)第三側室三ノ丸殿(織田信長の娘)第五側室大納言殿(蒲生氏郷の妹)もともに加わつて東下した。ただ愛妾中の第四側室加賀ノ局(前田利家の娘)だけが病氣中で参加してこなかったのである。

五月十四日には相馬義胤五月二十七日には佐竹義宣六月九日には陸奥五十四郡出羽十二郡の支配者である伊達政宗など、北関東や奥州の大諸侯が相統して当城に來降している。

また京都方面からは、四月十七日に本願寺光佐が来城して太閤の氣色を伺い、五月六日には公郷の築紫広門などの諸紳が使者を立てて秀吉の起居に奉向きさせている。

朝廷においても、勅使として権大納言勅修寺時豊が遣わされて、秀吉に天皇の宸翰と品々を賜つているがこのとき勅使勅修寺時豊も大納言中山親綱 同じく鳥丸光直の三郷が同行して小田原に來たり、石垣山に秀吉を訪問している。

このように、石垣山には京の貴紳、天下の諸侯たちが、日夜引きもきらず往來するし、各地から有名商人も集まつてきた。

秀吉は東行のとき最初から御伽衆、芸能人は勿論のこと囲碁師も召連れてきた茶人千利休一門が随行したことは言うまでもないが本阿弥光悦も召されていたと言われる。まことに天正十八年四月より七月に至るまでの百日の間は、石垣山に大坂城と聚楽第とを合わせた縮図にしたような有様が、百日間の都、首府の感を呈したのである。

このようにところに、思の悲劇が突如として起きた
いもかけず、茶匠山上宗二のである。

天台宗東北大本山

中尊寺見聞記

木曾正雄

東北の偏境にあって、しかも交通機関の発達して、なかつた十二世紀の平安朝末期に、京都・奈良における王朝文化にも匹敵する黄金文化を、平泉に築いた藤原清衡・基衡・秀衡父子三代の偉大なる業績に驚歎し中尊寺旅行を機会にその見聞の概略をお知らせします
中尊寺塔建立に着手したのは、長治二年(二〇五)清衡五十才のときで、二十一年の長い才月と莫大な費用、労働力を費やして、大治元年(二二二)完成した。堂塔四十余宇、禅坊三百余宇その他仏像、書画、諸工芸品等の製作には、土地の人々は勿論、遠く都から知識僧や優秀な技術者を招致したのである。清衡はこの大事業を完成した翌々年、七十三才の生涯を閉じた。

清衡に次いで二代基衡は毛越寺を、三代秀衡は無量光院を建立し、三代にわたって平泉に仏国土建設の偉業を達成したが、中尊寺は

建武四年(三三三)の野火によって、金色堂、経蔵および三千余点の宝物を残し他はことごとく灰燼と化した。五月十八日午前七時半、仙台をたち、息子の車で平泉に向った。日曜日の高速道路は、早立ちのためかすいていたので、一時間四十分位で中尊寺に到着することができた。中尊寺入口の町営駐車場まで車を降り月見坂を上って行く。

東物見台の展望台からは北上川、東稲山、衣川の古戦場などが一望できる。東物見台を後にし、少し進むと左手に弁慶堂、右手に中尊寺本堂・峰の薬師堂、更に左手に恩愛精舎がある。この恩愛精舎こそ藤原清衡公八百五十年遠忌大祭「秘仏一宇金輪仏特別御開帳」(自昭和五五、三、二四至五五、一、一〇)されたる処で、五百円の入場料を払って拝観する。この一字金輪大日如來の尊像は、彫像としては現存する唯一

の遺例といわれ、匂うばかりの美しい面ざしは、世に「人肌の火日」と親しみ敬われている。この尊像には背面がなく、高肉彫りのような形状で光背に密着している。柱材の寄木造りで、頭部も体も腕も首の辺りまで内刻りされていて、ほとんど他に例のない手法である。
肌色のおもてに細く三ヶ月形に眉を引き、やさしく見つめる半眼、小さな紅色の唇はかわいらしい。肩から両腕にかけて豊かな円やかな線、二本づつの腕輪が軽く肌をおさえ、智拳の印を結んでいる。女性的な麗姿は、さわってみたい衝動にかられ、時のたつとも忘れて凝視していた。像高九十五釐。
次の見学場所、金色堂の入口でまた五百円の拝観料を支払(金色堂・経蔵・旧覆堂・讚衡蔵を拝観でき、金色堂覆堂に入る。金色堂は、清衡が十六年の才月をかけて完成したお堂で、お堂全体に漆を塗り、金箔を押し、内陣を三壇に分けて、金銀・螺鈿(貝はめ細工)・珠玉をちりばめ各壇にはそれぞれ阿弥陀如来を本尊とする十一体の仏像が安置され、極楽浄土の善美を表わしている。金色堂の覆は、昭和三十一年か

ら六十年をかけて保存復元修理がほどこされ、現在の覆堂がかけられた。各須弥壇の中には藤原四代公の御遺体が安置されている。金色燦然と輝く金色堂覆堂を出ると、近くにある旧覆堂や経蔵が、古めかしく質素な建物に見える。
朝からの見学で、いささか疲れたので、食堂に入り中食をとってから白山神社にお参りをする。白山神社は、中尊寺の地主権現で北方鎮守として崇められた。鎌倉時代には、毎年卯月初午の日が祭礼で、遠国からの参詣人でにぎわった。白山神社の境内に立派な野外能楽堂が現存している。嘉永二年(一八二〇)正月八日、白山神社の本殿から出火した火災は拝殿を焼き、更に能楽堂も炎上した。現在の能楽堂は、嘉永六年に再建されたもので、鏡の松は、昭和二十二年能楽家松野奏風師によって初めて描かれたものである。杉木立ちに囲まれたこの能舞台は、重厚な茅葺きの屋根の下、堅固・豪放のうちにも古式豊かな典雅な建物で楽屋(舞台の裏面に隣接する部分)の外観を見ることができ、また舞台と橋掛りの角度が百二十度もあって、数少ない野外能楽堂としては、一見に値する。

ちなみにこの能楽堂では春の藤原祭りの期間のうち五月四日は、古典式三番・神事能が奉納され、五月五日は、能楽数番が上演される。また八月十四日の晩には、新能の開催もあり、歴史と文化の町にふさわしい行事となった。
白山神社のそばに資料館があり、能楽関係の資料を多数展示していたので、貴重な能面や能装束を觀賞することができた。
資料館を出て、金色堂の横に映画館と讚衡蔵があるので此処を見学する。映画館(入場料五十円)は、昭和二十五年三月「中尊寺藤原四代御遺体学術調査団」の調査中の模様を撮影したフィルムを公開であり、讚衡蔵には清衡・基衡・秀衡

東遠州地方の

史跡巡り

香川 政治

六月の行事として昨年度より実施してきた阪東三十三番観音巡拝とその周辺の史跡を尋ね見聞をひろめて来たが北関東方面に未了の所が大分残ってあったが、五月の定例理事会の席上理趣の間よりこの未了箇所を是非との要望があり、これを採決、茨城、栃木方面三十三番巡拝と二宮尊徳先生の史跡を尋ねることとし、実施日を六月二十二、三両日一泊二日の行程、この準備を着々進めていった処突然衆議院解散総選挙と云う

の棺内遺品や、中尊寺関係の国宝・重要文化財等三千余点を収蔵してある。
ここで見学コースを一巡したことになる、もと来た道を引き返して、中尊寺入口に着いたのは、午後二時半で、昼食時間を含め、大体五時間半かかった。
帰途毛越寺に立ち寄った二代基衡が起工し、三代秀衡によって完成した毛越寺は、中尊寺に勝るとも劣らない程の堂塔・禅房や仏像があつたが、度重なる火災でことごとく焼失し、庭園のみ復原され「特別史跡」「特別名勝」の指定は受けているとはいへ、国宝級のものが全部灰燼に化したことは、かえすかえすも残念なことである。
(昭和五十五年六月記)

政変起り衆参両院のダブル選挙しかも投票日六月二十二日となり計画上晴天霹靂のパンチを受け急拠役員会を開き代替えとして東遠州地方の史蹟巡りに変更したというエピソードがあった

実施日は六月二十三日とバスの関係上開票日であるが止むを得ずこの日と定めた。開票日でいろいろと支障のある方もあり応募者が少ないではないかと心配したがそれも杞憂に終り、受付開始と同時に大型バス一台満席と云う好結果で参加不能の方数名を見、企画部として一喜一憂を感した

然しその反面参加不能の方々には折角の希望に叶えることが出来なかったことを紙面を通して深甚のお詫びをさせて戴きます。

さて余談はさておき六月二十三日(月)藤棚前七時半集合の八時出発、バス一台一行五十四名にて松田イン

ターより東名高速道を一路西進、車の流れも順調に途中富士宮サーピスエリヤにて小憩、袋井インター十時二十分着高速度と別れ数分にして袋井市久能町に在る

可睡斎着時間の関係上寺の内部拝観省略次第の森町に在る大洞院と順次別掲のコースに従い見学帰着の時間を考慮し予定を変更し清滝寺を最後とし小夜の中山、牧

の原茶園見学割愛天竜市より浜松インターに直行ここより高速道を掃路に着く。往路と同様交通渋滞もなく快適なドライブにて十八時三十分小田原着解散。

梅雨期にて心配された天候も終日恵まれ有意義な史跡めぐりが出来た。終りに当りの中野先生の案内を記し不参加の方々の参考ともなれば幸です。

附記
予定のコースを全部消化するには距離が相当あるが時間を操作すれば十分一日の日帰りの旅は可能と思われる。

コース
小田原(○)・松田↓東名↓袋井↓久能↓可睡斎↓森町↓大洞院↓小国神社↓天竜市(中食)↓二俣城↓清滝寺↓掛川市↓金谷町↓小夜ノ中山↓牧の原↓東名↓小田原(△)解散

◎可睡斎
静岡県袋井市久能に在り可睡斎は寺の名にて山号を万松山といひ、遠州曹洞宗の大寺院、秋葉絵本殿(火防守護の本山)寺の由来によるとおよそ六百年前、忽

伸天閣禪師の開基、降つて十一代、幼い家康とその父を戦乱の巷より救出、その後浜松城主となった家康は親しく和尚を招いて旧恩を

謝した。その席上にてコクリコクリと無心に居眠りをする和尚を見て家康はにこりせられ「和尚我れを見ること愛人の如し、故に安心して眠る。我れよくの親密な情を喜ぶ。和尚よく睡るべし」と云つてそれ以来「可睡和尚」と愛称せられ、後に寺号も「可睡斎」と改められた。

また度々家康の心を安らかにした旧恩に報いる意味で、駿河、遠州、三河、伊豆四ヶ国の総録司と云う職を与え拾万石の礼を以て待遇せられ、以来歴代の住職は高僧が相次ぎ天下の「お可睡様」と呼ばれるにおよび名実ともに東海道における、禅の大道場である。

火防守護の秋葉絵本殿可睡斎は日本唯一の火防霊場にて明治六年廃仏毀釈に伴い、三尺坊大権現さまのご本体が、秋葉山秋葉寺より可睡斎へご遷座された事から起こつたものである。以来秋葉絵本殿三尺坊大権現鎮座道場として全国に奉祭する秋葉様の総本山として名を知らるるに至つたのである。

三尺坊大権現は一三〇〇年前、新瀧戸隠村岸本家に生れ、信濃蔵王権現堂の第一道場たる三尺坊にて修業成就、観音大士の御化身として、信仰を頂いておる。

誓願に曰く
第一 我を信すれば、失火と延焼と一切の火難を逃す。
第二 我を信すれば、病苦と災難と一切の苦患を救う。
第三 我を信すれば、生業と心願と一切の満足を与う。
一心以て我を信すれば、諸々の心願必ず成就す。
○小国神社
鎮座地 静岡県周智郡森町一宮
御祭神 大己貴命
遠州一ノ宮で式内社、境内三〇万坪あって古杉林立して深玄幽翠の気みなぎる社殿は明治十九年の建造であるが大社造の型式にて屋根は精巧な桧板葺で風格がある。
御由緒の概略を記して見よう。
御神徳 須佐之男命の御子にして父神の命により豊葦原の国を開発し稻穂の稔る瑞穂の国に造り上げ天孫に国土を奉つた大功を称へて大國主命とも国作之大神とも大穴牟遲神と称へ又農業山林鉱業縁結び医薬禁煙の法を授け給ひ徳を称えて大物大玉の神と志国玉神と難辛苦の修業を積まれ統治者となられ國中の悪神を平定せられた質実剛健と勇氣

を称へて葦原醜明命とも八千矛命と申し尊貴を称へて大己貴命と申す等国土開発縁結び山林農業医薬知徳剛健等の守護神と敬はれ御神徳極めて高い(古事記日本書記等)
本社を小国神社と申すのは出雲の大本宮に対する遠江国地方の美称であつて当社は古来より許当麻知神社(願い事を待つ意)とも事任神社(願い事のままに叶う意)とも固有の別命がある。
○由来 創紀は神代と伝えられ上代の事は詳でないが社記によれば人皇第廿九代欽明天皇の御代十八年二月十八日本宮(本宮山)に御神靈が出現せられ奇瑞あり天聴に達し勅使を差遣せられ社殿を造営し正一位の神階を授けらる。第四十二代文武天皇の大宝元年春十八日勅使奉幣し十二段の舞楽を奉奏せられ、第六十代醍醐天皇の延喜七年に勅して社殿を改造せられ(延喜八年社記)延喜式内社に列す(延喜式)承和七年及貞観二年、十六年従四位の神階を奉る(統日本後記三代実録)第九十六代後醍醐天皇の元弘建武変乱以来勅使が廃され神主代りて其式を行ひ戦乱相次ぐ室町時代に至るも神事祭礼欠くる事なく(社記)朝野の崇敬極め

て篤く遠江国一宮と称へられる。元龜三年徳川氏の日代武藤利部ひそかに武田氏に内通し甲州兵を招き当地に叛くや神主小國豊前重勝靈夢に感じ子息を人質として徳川氏に訴へ家康公は神主に命じ神爾を別所谷(東谷の遺跡)に遷し願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を奉り戦捷を祈願し社頭に火を放ち勝を得て天正三年(一五七五)に本多重次に命じ社殿を建立し更に天下平定の報賽として同十一年(一五八三)十二月七日社殿全部を造営遷宮せしめその後元禄十年(一六九八)綱吉將軍横須賀城主西尾隠岐守に命じ悉く改造し寛保元年(一七四一)吉宗將軍より四百両の修復料を寄進せられ明治六年(一八七三)國幣小社に列せられ大東軍戦争終戦後遠江国一宮として崇敬せられ現今に至る(社記)

◎大洞院と森の石松の墓
橋谷山大洞院は応永年代(一四二)に建立された曹洞宗の大寺院で末寺は三千寺あつて遠州布教の中心であつた。
大洞院は静岡県周智郡森町に在り森町は信州街道の宿場町、浪曲で有名な……流れも清き太田川……が流れ、次郎柿の原産地で、森の石松の郷里である。

遠州史跡めぐり収支報告

S 5 5 . 6 . 2 3

	収入	支出
会費(51×3,000)	162,000	
バス代		80,000
昼食代(57×850)		48,450
通行料		14,000
お礼(運・ガ)		5,000
保険料(55×50)		2,750
可睡斎 パンフレット		2,750
雑費		28,300
計	162,000	181,250
差引		△19,250

◎二俣城
天竜市二俣町に在り、もと磯原城といひ、戦国時代

石松の墓は寺の境内外駐車横場の一段高い処に建てられ現在の墓は三代目とのこと、一代目、二代目の墓は影も形もなく失っているそれは勝負師とか心ない人達によつて墓石を砕いて持ち去つたのことが？悲説を信する者達が砕いた石の破片を所持していると、競輪、競馬等総べて勝負の世に強いとの迷信によつて墓石を破損し一代、二代の墓石は影も形もなく現在三代目も既に相当損傷を受けている。清水の次郎長一家の森の石松も世の為人の爲とはいへ、定めし冥土の旅路で霊も迷つてゐるのではないか、むしろ石松は苦笑してゐるではないかと想像すると感無量!!

◎清滝寺と松平(徳川)信康廟

に今川、武田、徳川の三氏が攻防を繰り返した激戦の城で、文亀三年(一五三〇)今川家の部将二俣近江守昌長は築城その後城主は今川の家臣松平氏によつて受け嗣がれたが元亀元年(一五七〇)武田勢に攻められて落城、四年間は武田の家臣芦田氏の居城となつた。天正元年(一五七三)徳川氏がこれを攻めて落城させ翌年には奪ひ返され、更に翌年には再び徳川氏がこれを攻め落し、最後に小田原大久保家の祖忠世の居城(二万石)であつたが天正十八年(一五六〇)家康の関東移封で忠世が小田原城主となつたので、二俣城は廢城となつた。本丸跡の石垣、二之丸、曲輪跡、天主台、空堀、土塁が残つてゐる。

信康は徳川家康の嫡男であつたが、実母築山殿事件に座し天正七年(一五七〇)九月十五日二俣城中にて自刃した。二十一歳。清滝寺にはその遺体を葬つたところで、寺の後に墓と廟がある。

清滝寺殿前三州太守遠呂善通大居士、という。廟前に追腹者として大久保忠世の墓がある。
応永十三年(一四三六)然蓮社最明長安房(清滝寺開基)が境内滝の本に庵を結んだ。文安元年(一四四四)十月十八日長安房寂。以後この庵は長安房と呼ばれ、次々に庵主が住み継いだ。
天正七年(一五七〇)九月十五日松平次郎三郎信康(家康嫡男)が信長の口難に逢い二俣城において自刃したこの時浜松より二俣村役人共を呼び出し、二俣には浄土宗の寺院何ヶ寺あり、寺号は何と云うか書き出せと仰渡しがあつた。ところが二俣村には浄土宗寺院は一ヶ寺もないという返事で、それでは庵室でもよいからという次第で、長安院の地に信康の廟所、位牌堂その他諸堂を建立することになつた。とりあえず、翌十六日に上使淡河四郎右衛門を以て、信康の菩提のため聖

観世音菩薩の凡そ六尺の立像(伝行基作)を納め、観音堂を建立させた。
信康自刃の後、長安院六世光蓮社玉善阿春忠和尚(清滝寺開山)がとりあえず密葬を執り行ひ、法名を飯に常法院松翁道樹と授けその後參州岡崎大樹寺十五世春譽和尚がかけつけ、本葬を行い、「勝雲院隆若長越」という法号を授けた。
後家康が浜松よりこの地に至り、寺の入口に滝のあるのを見て、信康の法名を清滝寺殿前三州遠呂善通と改めさせ、同時に寺号も清滝寺と改めさせた。
慶長八年(一六〇三)九月二十五日
船明村において二十八石二斗八升の朱印地を頂戴する(東照公家康)
永応二年(一六五五)八月十日
川島次郎八重政、梵鐘を寄進
寛文八年(一六六八)
諸堂増改築、当時の山門と欄間の透し彫の一部が現存する。
○寛文九年(一六六九)二月十五日
従来船明村の朱印地を返して、代りに敷地村五十二石余、清滝寺中六石二斗余合せて五十八石二斗余の朱印地を頂戴する。(四代將軍家綱)三十石の加増

享保十三年(一七二八)寺社奉行に願ひ出で、この年より、下馬札、制札を寺の登り口に建てる。これまで柄札信康公とのみあつたのを御菩提所清滝寺と改めた。九月十五日信康百五十回忌法要。
明治元年(一八六六)大政奉還 朱印地返上
明治六年(一八七三)五月六日
清滝寺本堂を校舎として二俣学校創立
明治十年(一八七五)
清滝寺本堂を取壊し二俣学校校舎が新築された。
明治四十年(一九一七)二月二十九日
二俣尋常高等小学校が清滝寺外へ移転
大正四年(一九一五)
本堂その他の諸堂再建、落慶、現在に至る。
昭和三十六年(一九六一)九月十五日
梵鐘再建
○建造部
山門 寛文八年(一六六八)建立

百六年を迎えた吾が国鉄と
額田 喜代春
外国鉄道の四方山断
額田 喜代春
鉄道は一度に沢山の人や

○寺宝
・聖観世音菩薩像(像高さ等身大) 天正七年家康公の寄進(行基作)
・不動明王像 天正八年家康公の寄進
・徳川家康公木像 寛政四年(清水数馬作)
・内山貞電出雲日記写本 大畧筆
・御朱印箱と御朱印写
・柄札
・下馬札
・制札
・八代將軍吉宗公拝領中啓

貨物を輸送することの出来る交通機関でありますから運ぶべき人や貨物があり少ないと、折角の大きな輸送力をもあましてしまい経費ばかり、かかる赤字経営になってしまいます、人口も少なく、これといった産業もない過疎地域では鉄道は毎日大きな赤字を出しながら運転されているのです。

このような鉄道は、出来るだけ経費をきりつめるため、列車の回数を減らしたり、駅を無人駅にしたりしています。けれども列車の運転回数がへつたりすると人々はバスや自家用車を使うようになって、鉄道の利用は益々減つてしまつて悪じゆんかんをくりかえします。

このような状態になつても、朝夕のラッシュアワーには、バスで運びきれないほど多くの通勤、通学客があるので、なかなか廃止することは、むずかしいのです。そこで、赤字のローカル線は、経営者側からみれば、大きな負担ですが、沿線に住んでいる人々からみれば、なくてはならない交通機関といえます。

そこで、駅員のいない無人駅を造り、車掌が切符を売つたり、集めたりいたします。しかし、バスとか、

トラックは、鉄道とは反対に比較的少ない人や、貨物を短い距離だけ運ぶのに適した交通機関ですからこの地方では、鉄道より自動車の方が、運転回数や、停留所の数を多く出来て、交通機関としては、大変便利です、そのため、自動車の発達によって、競争に負け、廃止されたりした鉄道も過疎地域では稀らしくありません。

(三三) プレーキとパンタグラフの話

(1) プレーキ
長い編成の列車を、安全に運転するためには確実に速度を調節できて、間違ひなく停車できる装置を備えていなければなりません。速度を下げ、停車するためのブレーキ装置には、動力方式と人力式があります。

電気ブレーキ、エンジンブレーキ等があり、人力式には側ブレーキと手ブレーキがあります。

(2) パンタグラフ
集電装置といつて、電氣車両が外部より電力を取り入れるのが集電装置で架線から取入れるのがパンタグラフ、パンタグラフには、Zパンタグラフのような変わったものもあります。

新幹線の電車のパンタグラフは、架線の高さが、一定しているため、非常に小形になっています。また、地下鉄電車のような第三軌条から取り入れるのは、コレクターシューが使われています。集電装置には、いろいろあつて

(1) ポール
これは昔の電車に使われていましたが、スピードを出すので、架線からはずれ易いので、現在はほとんど使われておりません。

(2) ビニール
ポールに変わつて現在、市街電車に使われております。

(3) 新幹線用パンタグラフ
架線の高さが一定なので小形の性能のよいものが使われています。

(4) Zパンタグラフ
ビニールの改良された形です。

(5) 集電シュー
線路わきの第三軌条(サイドレール)から電氣を取り入れるもので、地下鉄などに使われています。

(三三) A T S 装置のはなし
先に行く列車と後続列車との間が適当でない、追突の危険があります。また

単線の場合は、かわるがわる運転しなければ、正面衝突の恐れがあります、そこで、これらのことが安全に行なわれるためには、信号機が必要になるわけで、列車は信号機の指示によって運転されます。信号機が停止を示す赤の時、列車は必ず停止しなければなりません。

A T S 装置とは、線路の間信号機と連動した装置(地上子)をおき、車上にこれと反応する装置(車上子)をおき、運転台に連動するようにしております。もしも、運転士が信号を見落として、列車そのまま進行した場合、運転台に赤ランプがついて、ブザーが鳴り、自動的にブレーキが働いて、列車が停止します。もうすこし、くわしく説明いたしますと

(1) 車上子とは
動力車の床下についていて、地上子から出る電磁波をうけ取る装置です。

(2) 地上子とは
信号機の指示と連動して電磁波を車上子に送ります

(三三) A T S 装置のはなし
A T S が信号機の停止指示

示だけの働かしをするのたいして、A T C (列車自動制禦装置) は、信号機の減速、注意などの速度の指示にたいして働きます。例えば、列車が指示された速度をこえていて、運転士が気がつかない場合にも、自動的にブレーキがかかる仕組みになっています。新幹線の場合は、進行、停止のほかに、時速百六十キロ七十キロ、三十キロの三段階の速度が指示されています。

それからA T C の仕組みは信号機の指示による電流を軌道側に流しておきます。車上側はこの電流をうけて列車の速度が、指示された速度より速い場合は、自動的にブレーキがかかります。新幹線の場合は、信号機の指示は地上側ではなく、車両の運転台に直接指示するようになっています。

C T C (列車集中制禦方式) とは、信号機、分岐器などの操作を一箇所で管理して、列車の運行の安全をはかる装置です。

以前は、各駅で信号機や、分岐器の取扱を多くの人達で行なっていました。最近では、新幹線だけでなく各線区にも使われています。

④ 東海道新幹線では、東京駅であつて、信号、ポイントの様子、列車の走つて

いる位置が、ひと目でわかるようになっております。

編集部より

史談に原稿を頂きました諸先生に厚く御礼申し上げます。御蔭様で皆様に沢山の投稿を頂き編集部として此んな喜びは御座りませんが紙面の都合上掲載の遅れて居る方も御座いますが悪しからず。

史談会は会報、講演、史跡廻りが主体の様には思われますが、此の外小田原市旧町名の再調査及史談会報の総括編の作製を計画して居ります。会報小田原史談は三十六年に創刊して満十九年になり来年は二十周年を迎えようとしております。

四十五年に史談総括編第一巻として五十号までを出しましたが、此の史談で二〇二号となりましてので五十一号より今日までの総括編を来春作るべく計画して居ります。

事務局より希望者の調査があると思ひますが、予め御承知下さい。

尚十一月十六、七日に泊で足利方面の三十三観音及其の周辺史跡廻りを行う予定です。